



若い群像

「ご苦労さまです」という声に肩にくい込んでいたカバンが一瞬軽くなったような気がする。

雪の中を、雨の中を人々の心と心の交流を深める便りを配って、早くも十ヶ月が過ぎた。

越谷健一君は、留萌郵便局の郵便課に勤める、若い郵便屋さん。一日に約千二百通もの郵便物を処理するという。

局に入りたての頃は、右も左もわからずに、先輩に教えられたり地図と家名を首びつきで廻ったのも昨日のこのように思う。

今では、名前をいわれただけでその家を思い出すことができるまでになったという。

一番つらいのは、寒さなどより雨や雪が降ったりすると、郵便物を汚さないように細心の注意を払うこと。

市民の人に望みたいのは、何とんでもなくても郵便箱を備えてほしい」という「戸の隙間から差入れたりして郵便物が汚れたりするからね」越谷君は、今日も十八人の仲間とともに、人の心を配っている。

広報

若い群像

'73 2月号
第179号